「道つくり」という場が作るもの
―集落における共同作業の意味―

柴　田　彩　子※

要旨：

農山漁村においては、そこに居住する人々自身の手で集落環境の整備を行なう村仕事の慣行が見られる。人口減少や高齢化によりこうした作業が続けられなくなる事態へは、他出した子どもや孫、また外部のボランティアに作業を手伝ってもらう、移住者を迎え入れる、といった対応が始まっている。一方で、集落環境の整備や祭りの準備といった共同作業の場は、移住者がコミュニティへ入り込んでゆくための有効な手段であるということが現場で実感されている。

そこで本研究では、山梨県早川町薬袋の「道つくり」と呼ばれる村仕事の参与観察を行い、道つくりという場が他出者や移住者、非定住者を含めたそこに参加する人々にとってどのような意味合いを持つのか検討した。

薬袋の道つくりには、地元の人のほかに孫ターンの若者や新旧の移住者、他出者、さらに必ずしも出席の義務はない集落内の事業所の関係者および移住予定者などが出席していた。参加者は、それぞれの慣れや技能などを鑑みて６つのグループに分けられ、作業を割り振られた。

参与観察の結果、道つくりは、まず、作業を通じてあり合わせのものを創意で使うといった知恵や技術を活用し、それを来たばかりの移住者や非定住者に共有・継承する場であった。また、作業の合間にかわされる会話などを通して、集落の時間的・空間的広がりを実感し再認識する場であった。そして、参加する義務を果たす中で、「村仕事に参加するのは当然の義務である」という感覚自体を獲得し定着させていく場でもあるといえる。

以上から、道つくりをはじめとする共同作業の場は、正統的周辺参加者である移住者や非定住者が、集落という実践共同体の一員になっていく過程の学習の場なのであると捉えることができる。なお、非定住者が道つくりという実践に参加し学習していく過程では、他出者や移住者といった「半よそ者」と呼びうる人々が媒介役となっており、この「半よそ者」の役割についてはさらに考察をかめる必要がある。

キーワード：正統的周辺参加、集落、共同作業、移住者

Meanings of Collaborative Work In Japanese Villages

Ayako SHIBATA

Abstract：

In many villages in the rural areas of Japan, we can observe the custom of maintaining the village surroundings on their own. In some situations where such work cannot be continued due to the

※　しばたあやこ　　弘前大学大学院地域社会研究科客員研究員
saisai.tei188@gmail.com

declining and aging population, children or grandchildren living other places or outside volunteers have been asked for assistance, and migrants have also been welcomed. Meanwhile, communities have effectively integrated newcomers through collaborative work such as communal work on public spaces in the village and preparing for the festivals.

The aim of this paper is to figure out the meaning of this collaborative work for its participants. The data is based on participant observation of "Michi-tsukuri (Making a way)" event in Hayakawa-cho, Yamanashi prefecture, in which the entire village participated.

Participants were divided into six groups of mixed migrants and non-inhabitants (former inhabitants, visitor and commuter) according to their skills.

My participate observation revealed that through work, it became a space of improvisation where in knowledge and techniques shared and passed on newcomers and non-inhabitants. In addition, through the conversation and interactions in interstices between work, participants experienced some for the first time and recognized the temporal and spatial extent of the village.

Using J.Lave and E.Wenger's "Legitimate Peripheral Participation (LPP)" theory would posit this as a place of learning where newcomers and non-inhabitants are able to begin to legitimately participate in a peripheral way in the village understood as a community of practice.

Furthermore, in the process of non-inhabitants' participate in "Michi-tsukuri" and "learning", those who might be called "semi-outsiders", such as former inhabitants and migrants, act as intermediaries.

Key Words: Legitimate Peripheral Participation, village community, collaborative work, rural migrant

Ⅰ．はじめに

１．研究の背景と目的

農山漁村においては、あらゆるものやことが商品化された今日においても、そこに居住する人々自身の手で集落環境の整備を行なう慣行が見られる。本論で取り上げる「道つくり」もその一つであり、集落内や周辺の道路・農道の泥上げや集落を取り囲む獣害除けの電気柵周囲の草刈りなどが行われている。

こうした慣行が近年、人口減少と高齢化により続けられなくなる例も少なくない。これに対し、他出した子どもや孫、移住者、さらには地域内外のボランティアに作業を手伝ってもらう試みも徐々に広がっている。本論ではこれら「非出身or非居住」者と「出身and居住」者とがどのようにして集落環境の共同管理に関わり、互いに意味づけあうのかを考察する。なぜなら両者それぞれに意味づけられて初めて、両者がともに関わる共同管理の新たなかたちも持続してゆくと考えられるからである。

この点について、本論も取り上げる山梨県早川町を素材とする高井は、地区外のボランティアと集落居住者との年代が近く、また面識があると共同管理への参加が促されやすいと示唆している[1)]。これに対し、「年代の近さ」や「面識」から一歩踏み込んで「意味づけ」について考察しているのが皆川である。皆川は京都府南丹市美山町Ｔ集落を素材として、まず「祭りなどの伝統行事への参加が（中略）新住民にとって村へ溶け込む機会となっている」ことを確認したうえで、次のように指摘している。「新たに人を引きつけているのは、Ｔ集落の持つ地理的要因や自然環境のみではなく、そこの住人たちの集落に対する働きかけである」[2)] すなわち、「地元住民の土地を守ろうという姿勢と新規住民に対する開かれた姿勢、また新規住民の集落への積極的に関わろうとする姿勢であり、双方が持つ集落への帰属意識から実現している」と言うのである。ここで皆川が注意を促しているのは、ま

ず「働きかけ」と「姿勢」である。すなわち、たんに「年代が近く面識がある」から住人たちと新規住民の共同が生まれるのではない。双方が持つ集落に対する「姿勢」、つまり言語化しづらい価値観と、何よりもそれに裏打ちされた住人から新規住民に対する「働きかけ」が重要だと言うのである。

もっともここで指摘される双方の言語化しづらい価値観については、往々にして一致しないという指摘もある。たとえば株木は、愛媛県Ｕ町Ｏ地区13大字と山形県Ｓ町Ｙ大字での全数調査にもとづいて、「地域の維持・活性化に寄与してほしいという地域住民の期待と帰郷者・移住者の望む生活像が合致しない」事態に懸念を示している[3)]。ここで言われる「期待」と「生活像」とは「価値観」と呼んで差支えあるまい。

これら皆川や株木の議論に対し本論が注意を促したいのは、「両者の価値観の一致や相違は揺るがないものなのか」という疑問である。皆川が注目しているように、両者の価値観の一致や相違は、住人たち、あるいは可能性としては新規住民からの「働きかけ」を通じて促されるということはないのだろうか。

この点で興味深いのが、レイヴとウェンガーによる「正統的周辺参加論」である[4)]。この議論は、メキシコ・ユカタン地方のマヤ族の産婆やアメリカ海軍の操舵手など世界各地５つの徒弟制のエスノグラフィにもとづくもので、徒弟制をたんなる技術の学習・継承過程としてではなく、親方＝古参者と弟子＝新参者とが「実践」を通じてかたちづくる共同体として描き直すものであり、教育学や組織論では幅広く援用されている。そこで注目されているのが何よりも「実践」であり、それにより古参者と新参者とが価値観を共有したり調整しあったりする過程が重視されている。その意味で、皆川が注意を向ける「働きかけ」も、住人たち＝古参者と新規住民＝新参者との価値観の共有・調整に寄与していると考えられるのである。

もっとも従来の集落環境の共同管理をめぐる議論では、高井や皆川のように関係者に対するインタビューを行うにせよ、株木のように質問紙によって調査するにせよ、事後的な意識に焦点を当てるものが多く、「正統的周辺参加論」を組み立てるうえで不可欠な「実践」の観察とその考察が十分に行われて来なかった。そこで本論では、集落環境の共同管理の「実践」に参与観察し、そこでさまざまな属性をもつ参加者間にどのような「働きかけ」のやり取りが行われているのかを詳細に検討したい。

２．調査地

山梨県南巨摩郡早川町薬袋（みない）は、世帯数15世帯、人口37人（2016年５月１日現在[5)]）の小規模な集落である。近世からの村落で、明治の合併で五箇村、昭和の合併で早川町となった。

早川本流と濃田川との合流地点に南向きに開けた扇状地に位置し、早川の対岸は春木川の合流点であるので、山深い早川町内では比較的日当たりのよい集落である。早川町内では珍しかった稲作や、養蚕、近年ではワイン向けのヤマブドウ栽培など、農業が盛んであった。

集落の高台には、旧早川南中学校の跡地を利用した交流促進センターという町の施設があり、1996年からまちづくりNPO（以下、Ａ団体）が拠点として利用している。職員の１人が薬袋に居住しており、筆者もかつてＡ団体に勤務し薬袋に居住していた。さらに、2015年には空き家を利用して東京都内のIT企業（以下、Ｂ社）がサテライトオフィスを設けた。日常的な利用には至っていないものの、週末などに社員が数名ずつ来て、集落内の人とも交流している。

1990年以前に父が能面師、娘が陶芸家という一家が移住したのを皮切りに、以後、1999年から数年に１世帯程度のペースで移住者がある。Ａ団体のスタッフ、芸術家、役場職員、ラフティングガイドなどである。

自治会として「区」が設定されており、集落内に居住する全ての世帯（後述の住宅を除く）および、集落内に家屋がある世帯が加入している。区長以下の役員は１年交代の輪番制である。

集落の中には町営住宅と教員住宅があり、合わせて10数世帯が居住しているが、これらの住宅は「薬袋区」には含まれない。

3．調査方法

主要なデータ

2016年５月５日実施の道つくりでの参与観察によって得られたもの。

補足データ

2001年４月から2006年３月までの、薬袋集落内教員住宅での居住経験。

2006年４月から2010年１月までの、薬袋区での居住経験（当該期間に実施された道つくりでの参与観察を含む）。

2012年５月５日に実施された道つくりでの参与観察。

Ⅱ．薬袋における道つくり

1．「道つくり」とは

「道つくり」とは、「義務人足」「郷役（ごうやく）」「総人足（そうにんそく）」などと呼ばれる、集落内の各世帯から１人ずつの出席が義務付けられている作業のひとつである。欠席者からは「出不足金」などと呼ばれる金銭を徴収する地域もあるが、薬袋では徴収していない。

その理由について区長経験者は、「お金を出せば出席しなくていいと思われると困るから出不足金は徴収しない。」と述べている。その意味する所は、第一には出不足金はそれほど高額ではないので、人を雇って作業を手伝ってもらうには足りない、ということである。一方で、それなら出不足金の額を引き上げて作業員を雇えるようにするという話が出てくるかというと、そのようなことはなく、やはり“カネより労力提供が重要である”と考えられていることが示唆される。

道つくりに出席した人には、薬袋区から日当が出る。また、動力式の刈り払い機などを使って作業した人には、燃料代と機械損料が追加で支払われる。しかし、参加者は日当が支払われるから参加するわけではなく、薬袋に居住するあるいは家を持つ者のまさに「義務」として道つくりに参加する。

薬袋では、春（５月５日前後）と秋（10月前半の日曜日）の年２回行なわれる。作業内容は、毎回必ず行うのが農道の清掃と側溝の泥上げで、ほかに、獣害防止用電気柵の管理、道路わきの草木の刈り払い、簡易水道の貯水タンクの清掃、公会堂の清掃等を適宜行なう。

2000年代前半くらいまでは、山の中の道の整備も行なっていたが、高齢化や参加人数の減少傾向などにより現在は行なわれていない。

これらの作業内容は、農業生産に関わるもの（農道の清掃、獣害除けの電気柵の管理、山の中の道の整備等）と、生活環境に関わるもの（側溝の泥上げ、道路わきの草木の刈り払い、簡易水道の貯水タンクの清掃、公会堂の清掃等）に大別できる。現在の薬袋において農業は自給的な営みとしてしか行われていないが、それを守るための電気柵の整備は、道つくりにおける重要な作業と位置づけられている[6)]。

また、作業時間に関しては、2010年ごろまでは昼に１時間半ほどの休憩をはさんで午後３時くらいまでかけていたが、現在は昼前に作業を終了させている。

薬袋では他出者の参加も多い。薬袋の家に誰も住んでいないという場合だけでなく、2012年５月の道つくりでは、薬袋に居住する親が高齢化していたため、道つくりには他出している子が出席している事例もあった。

町営住宅・教員住宅には、薬袋区とは別の内容の作業が割り振られている。簡易水道の水源地と、下水処理場の清掃である。こちらの作業も毎年春と秋の２回行なわれ、各住宅入居者の全世帯から１名ずつ参加する。

2.「道つくり」に参加した人の属性

表1　道つくり参加者の属性と参加人数（単位：人）

参加者の属性		人数	（うち女性）
地元の人	地元に住み続けている人	7	2
	Uターン者	1	
	他出者	8	
	孫ターン	1	
移住者	20年以上の古株	1	
	30－40代の若手	6	1
非定住者	移住予定者	1	
	A団体関係者	3	1
	B社従業員	5	1
合計		33	5

（観察結果から筆者作成）

2016年春の道つくりの参加者33名を、属性別に表したのが表1である。

表中の「地元に住み続けている人」は、生まれ育ちおよび現住地が薬袋の人を指す。生活の基盤を薬袋に置きながら出稼ぎに出ていた人や、本人が薬袋出身ではなくても「地元に住み続けている人」に嫁入りした女性を含む。

「孫ターン」とは、本人の生まれ育ちではないものの、当該地域出身の親を持ち、祖父母の暮らす地域に移住してきた孫を指す。

「移住予定者」は、薬袋にある空き家を借り受け、移住することが決まっている人である。

「A団体関係者」は、薬袋以外の集落に居住しているスタッフや、休みを利用してA団体を訪れている人などである。A団体の関係者は例年、誰かしらが春の道つくりに参加することが多い。

非定住者には、本来、道つくりへの出席の義務はない。区長はこういった参加者を「ボランティアの皆さん」と表現していた。だが、完全なる自由意志による参加といえない側面もある。というのも、移住予定者が定住した際は出席義務が課されることになり、サテライトオフィスに利用している空き家を住居として貸し出していたら、その家屋の住人にはやはり出席義務が課されるからである。

このような、本来出席の義務がない、すなわち道つくりが行なわれることの告知もされない参加者には、A団体を通じて道つくりへの出席が要請された。A団体は早川町への移住希望者の窓口や移住者の支援業務も担っており、移住者に対しては、集落の仕事の重要性を説明して参加を促している。

A団体からの呼びかけに対し、移住予定者もB社従業員も前向きな姿勢で道つくりに参加していた。

3．作業の流れ

①　8時公会堂集合

当日は「8時から」という通知であったが、7時半ごろから草刈り鎌、ほうき、スコップなどを手にした人が集まり始める。中には、動力式の刈り払い機や二丁差しと呼ばれる刃物を持ってくる人もいる。

8時前に区長が「少し早いですが出席予定の方は皆さん揃いましたので始めます。」と発言して道つくり開始となった。

非定住者や移住して間もない人などにとっては、「5分前に集合場所に行ったら他の人はみんな揃っていて、いわゆる“自分待ち”だった」という状況は想像しづらい。そのため、時間の前倒しについて先輩移住者などが事前に説明し、早めに来るようアドバイスしている。

② 簡単なメンバー紹介

区長が非定住者を紹介した。地元の人や移住者の紹介はないことから、紹介はあくまでも在住者や他出者に対してのものであることがわかる。

③ 作業分担

作業箇所と内容を説明し、区長の采配で参加者を割り振る。今回は以下の6班に分かれた。

a．側溝の清掃

道つくりで毎回行なわれる。集落内の道路わきの側溝に溜まった泥をスコップですくい上げ、壁面に生えたコケや雑草を除去する。通常は、他の作業が終わった班から適宜側溝の清掃に取り掛かるという段取りであるが、今回は最初から側溝担当の班が作られた。参加人数が多かったためと思われる。

b．道路わきの木や蔓の刈り払い

道路わきから伸びて、自動車の通行の支障となるような木や蔓を除去する作業。

c．電気柵周辺の草刈り

薬袋の集落は、獣害防止のため電気柵で囲われている。電気柵に蔓などが絡むと漏電し、本来の機能を果たさなくなるため、定期的に周辺の刈り払いが必要となる。この作業には動力式の刈り払い機を利用するため、担当できるメンバーは限られている。

d．公会堂横の池の清掃

今回、初めて取り組んだ作業で、池の中の枯葉や木の根などを除去する。

この池は、薬袋の対岸にそびえる日蓮宗の霊山・七面山に関連のある池[7]だと伝えられている。また、現在公会堂が建っている場所にはもともと観音堂があり、一時期は公会堂とは別に堂宇があったが、今では公会堂の中に観音が祀られている。

区長の説明によると、熱心な日蓮宗の信者がこの池を訪れることがあり、そういった人から、本来は神聖なものであるはずの池が汚いという指摘があった。それが町長の耳に届いて、町長から薬袋区長に清掃の要請が来たとのことである。

e．お寺[8]境内の草刈り

住職とともに草刈りを行なう。

f．農道の清掃

集落の山側にはかつて水田や桑畑として利用されていた農地がある。そこを通る農道は現在では通行量が少ないため落ち葉がたまったり雑草が生えたりしている。それらを除去し、側溝の清掃も行う。

参加者の割り振りに際しては、作業範囲や内容がわかるか、必要な道具を扱えるか・所有しているか、どれくらい体が動くか、といった点が勘案される。その上で、作業量に極端な偏りが生じないように人数を配分するのである。区長が参加者の経験や体力を把握しているからこそ可能なことだと言える。

今回の作業に関しては、道路わきの木や蔓の刈り払いと電気柵周辺の草刈りには動力式の刈り払い機を用いることから、それらを所有しているメンバーが選ばれた。また、お寺境内の草刈りには地元の人と他出者が割り振られており、これは、檀家が担当となる計らいである。

農道の清掃の作業には特別な道具や技術が不要のため、たいてい、道つくりに不慣れな非定住者や、高齢の参加者・女性が割り振られる。今回は他出者Cさんと居住歴30年ほどの移住者Dさんとが作業の指揮を取り、その元で非定住者や比較的新しい移住者が作業を行なった。

④　作業開始

８時10分ごろに作業開始となった。割り振られた作業に必要な道具を持っていなかった人は、道具を取りにいったん自宅に戻ったりもする。

筆者は農道の清掃の班に割り振られた。この農道は集落の２か所と環状につながっており、二手に分かれてそれぞれの端から作業を始めた。スコップを使って側溝に溜まった泥を上げ、道路上の落ち葉を掃いて、道路わきの雑草を除去していく。

筆者は監督役のＣさんに率いられて、移住予定者やＢ社従業員、Ａ団体関係者と作業に当たった。このうち、移住予定者と一部のＢ社従業員は今回、道つくりに初めて参加した。

９時過ぎにＣさんの声かけで休憩。Ｃさんは自宅から飲み物とおやつを持ってきて差し入れてくれた。また、９時半前には区長が軽トラックで飲み物を配りに来た。

10時過ぎには反対から来たチームと合流し、農道班の作業は終了となった。合流した地点で10時半ごろまで休憩し、その後、公会堂に戻った。

⑤　作業終了、公会堂集合

農道班が公会堂に戻る頃には、他の班も作業を終え、公会堂に戻っている所だった。道具を自宅に置きに行く人などもいて、三々五々公会堂に集まる。

⑥　連絡事項の伝達等

公会堂の中にペットボトルのお茶が用意されており、上座に区長と区長代理者、コの字型に並べられた机に参加者が座った。前回までの道つくりでは、お菓子の用意もあったが、区長曰く、経費節減のため、今回からはお茶だけになったとのことである。

この場では、道つくりの終了の挨拶と、区長からの連絡、他の人からの質問などがあった。連絡事項や質問事項は、主に区の会計に関することであった。

ひとしきりの話の後、11時半ごろ解散となった。

４．作業中のエピソード

①　波板トタンの活用

集めた泥や落ち葉は、川原に投げ落としたり、空き地や植林されている農地に捨てたりする。ちりとりなどがなかったため、側溝の泥や落ち葉を捨てる作業に難儀していた。最初のうちは側溝を浚ってスコップに乗った泥をそのまま投げ捨てていたが、効率が悪かった。そのような状況でＣさんが50cm×120cmくらいの波板トタンを見付けた。掻きだした泥や落ち葉をまとめてそこに乗せ、２人がかりで捨てに行くことで、作業が捗るようになった。

波板トタンの便利さと、それを見付けて利用したＣさんの仕事ぶりを、非定住者たちは口々に賞賛していた。Ｂ社の従業員で反対側から農道清掃をしていた中に、自他共にトタン愛好家と認める人がいて、仲間の従業員たちは「あの人に教えてあげたい！」と盛り上がっていた。

②　ツバキの枝のほうき

作業途中、反対側から作業しているグループの人が、「ほうきを持っている人が足りないから、１人来て欲しい。代わりにスコップの人を寄越す。」と言いに来た。そのため、ほうき係が１人反対側に向かった。結果、こちらもほうき係が足りず、掃く作業が遅れがちになった。

時々、Ｃさんから、ほうきの作業をしているＢ社従業員や筆者に「そこまで丁寧にやらなくといいよ、きれいになっていいんだけどね。」と声がかかる。作業の丁寧さと速さの兼ね合いは、慣れないとなかなか適切に決められない。

そのうち、Ｃさんがツバキの枝を70～80cmに切ったものを、ほうき代わりに使うように他の作業

者に渡した。葉のついた枝で道路を払うのである。

木の枝を切ってほうき代わりに使うことは、道つくりで以前から見られたことである。しかし、Cさんがごく当たり前のようにのこぎりを取りだして枝を切ったことや、その使い勝手のよさに、非定住者は非常に驚いていた。

そして、休憩時間にはCさんに、このアイデアはどこから出たのか、使う木は決まっているのか、どんな枝でもいいのかといったことを質問していた。Cさんによると、枝をほうきとして使うのはよくあることだが、ツバキを使ったのは初めてだという。それでも、葉が落ちることもなく、使い勝手も悪くなかったということで、ツバキは良かったみたいだ、と結論付けていた。ほうきに使うには枝の形や葉の付き方を見て、適した枝を切っているとのことである。

B社従業員は、反対側から作業していた仲間にも、枝ほうきの実物を見せながら「すごいんだ！」と説明をしていた。

③　休憩中の会話

休憩中はCさんから、現在植林されてしまっている農地が以前は桑畑だったこと、Cさんが通っていた五箇小学校（現在は、早川南小学校に統合）までは、農道の途中から別れる道を登って通学していたことなどを聞かせてもらった。その際Cさんは話を聞いているメンバーに五箇小学校の跡地に行ったことがあるか聞いていた。中には通りかかったことがあるメンバーもいて、「どこ？」「これこれこういう所。」「行ったことないなぁ。」「行ってみたい！」と、非定住者の間でも話が盛り上がった。

④　作業終了後の会話

作業が終了し、公会堂に集合する際、清掃された池を覗き込みながら、10人くらいの他出者や移住者、非定住者が雑談していた。内容は、「ヤゴがいる！」「カワニナがいる！」といった生息している生き物の話や、「自分が子どもの頃にはこの池に魚がいた。カエルもいた。」「50年も前の話だな！」といった昔話だったりした。

Ⅲ．まとめと考察

１．観察結果が意味すること

上記のうち、①と②は暮らしの上での知恵や技術についてのエピソード、③と④は場所と歴史についてのエピソードと言える。

その辺に落ちていたトタンをもっこのように使ったり、木の枝を切ってほうきにしたり、といった知恵や技術は、あり合わせのものをその場の創意で利用した、在来知というべきものである。おそらくCさんは、薬袋で育つ中で、あるいは毎回の道つくりに参加するなかで、ごく自然に身に付けたのであろう。Cさん自身、普段の生活ではなかなか発揮する機会はないと推測されるが、それが必要とされる場面で当たり前のように使い、非定住者たちを驚かせた。

薬袋の道つくりではしばしば見られるあり合わせのものを使った仕事を、他出者であるCさんが実践し、それを非定住者たち（近い未来の薬袋の住人であり、薬袋の民家を利用する半住民）が、間近に見て感心する、という構図は、薬袋の生まれ育ちである人から、非定住者へ知恵や技術が継承された現場であると同時に、普段、特段の用事がない限り薬袋に戻らない他出者であるCさん自身を薬袋の住人たらしめている現場であるともいえる。

あり合わせのものでその場に必要なものを作るといった仕事は、普段は早川町でもほとんど必要とされなくなった。道路が整備され、自家用車で出かければたいていのものは購入することが可能になったからだ。

それでも、災害時などにはこういった知恵や技は重要になる。2014年２月の豪雪の際は、早川町はおろか山梨県全体が一時孤立状態となり、町内には断水する集落もあった。そのような状況で、薬袋の隣の塩之上集落では、区長が屋根から落ちる雪解け水を塩ビパイプで集め、大きな漬物樽に溜めて利用していた。これもまた、日常生活の中でまったく違う使われ方をしている道具をうまく組み合わせて、状況に応じた道具に作り上げ直している事例である。道つくりはそれらを継承する場となっているといえるのである。

また、農地の昔の話や、五箇小学校の思い出を聞くことで、非定住者たちは、「今ここ」だけでない地域の暮らしを垣間見ることができた。それも、ただ話を聞くだけではなく、その場を見ながら話を聞くことで、土地に刻まれた歴史を実感することができた。

さらに、五箇小学校の跡地を巡っては、非定住者の間でも行ったことがある人を羨ましがったり、「行ってみたい！」という発言が出るなど、自発的な関心が引き起こされていた。薬袋で育った他出者から一方的に知識を教えられるだけでなく、そういった歴史的背景を持たないもの同士が、薬袋に関わる土地を巡る物語を共有したと捉えることができる。

このような歴史の共有は、公会堂横の池を巡る思い出話も同じように捉えることができる。一方でこの池に関しては、いま現在生息している生き物について他出者や非定住者などが会話を交わしていた。近年は金網がかぶせられ、落ち葉や木の根などで様子がよく見えなかった池が、清掃によって存在感を取り戻し、多様な属性の道つくり参加者の間で共有可能な新たな場となったのである。

２．考察

前節のエピソードからは、道つくりが、在来知を活用した仕事や、集落の時間的・空間的広がりを共有・継承し、あるいは再認識する機会となっていることが明らかになった。

さらにいえば、道つくりに人が集まること自体が、薬袋の構成員を再確認する機会になっているとも言える。普段は別の地に居住していて顔を合わせる機会がなかったり、新しく引っ越してきてよく知らなかったりする人、さらにはＡ団体やＢ社の関係者といった「住民」という枠からは外れるが薬袋という地域をある面で共有している人々が、お互いの顔を見て、共に作業し、なんらか声を掛け合うことで、「仲間」として関係を構築しているのである。

これらのことから、道つくりは、「薬袋」という集落で暮らすこと、あるいはその暮らし方を、様々な角度から継承し再確認する行為であると捉えられる。

ここで、正統的周辺参加論の枠組みを使って、これまで述べてきた道つくりの場の持つ役割を整理してみたい。

正統的周辺参加論は、レイヴとウェンガーが提唱した学習に関する理論である。

正統的周辺参加論においては、人は、何らかの実践に参加することを通して学習を深め、実践共同体の一員になっていくと考えられている。ここでは、学習とは参加することそのものであり、知識や技能だけでなくアイデンティティを獲得していく過程でもあるのである。当初、新参者は周辺的な参加をしており、徐々に十全的参加をする古参者になっていくと考えられている。実践共同体には様々な段階の参加者がいて、古参者の参加のしかたも、「中心的」なのではなく、あくまでも「十全的」なものである。

これらを踏まえて、集落という共同体を「実践共同体」として捉え返すことで、見えてくることがある。

すなわち、集落とは初めからそこにある実体ではなく、村仕事をはじめとする実践に関わることによって構成されるものであり、非定住者だからといって排除されるものではなく、正統的周辺参加という実践への関与の道筋も開かれているのである。

レイヴとウェンガーは「人は実践者となる。すなわち古参者になってゆく新参者（中略）―要するに、実践共同体の成員―となるのである」[9]と述べている。

たとえば、今回の道作りで二手に分かれて農道の清掃を行ったグループのうち一方は、移住して20年以上たつＤさんが作業を監督していた。また電気柵周りの刈り払いを行なったＡ団体職員である移住者Ｅさんは、移住当初は農道の清掃に割り振られていたが、ある時からより技能や体力の必要な刈り払い作業に割り振られるようになった。これらは、周辺的参加者であった新参者が、十全的参加をする古参者に「なった」ことにより、重要度の高い作業にあたるようになったのだと捉えられる。

正統的周辺参加論において、学習とは実践への参加を通したものである。トタンの板をちりとり代わりに使ったり、ツバキの枝を切って作ってくれたほうきを使って掃除をしたりしたことで、新参者（正統的周辺参加者）である非定住者は、集落という実践共同体でのＣさんをモデルとした十全的参加のあり方や、レイヴとウェンガーが「実践の文化」[10]と呼ぶところのものを学ぶのである。

この「実践の文化」とは、知識や技術にとどまらず、ものの見方やふるまい方、その共同体のメンバーであることのアイデンティティなども含まれている[11]。この点もまた、集落という共同体について考える際に示唆深い。本研究で事例を検討した集落環境整備の活動や、祭りなどの伝統行事は、それ自体が集落にとって重要な行事である。その重要な場面を共有していること、それを重要と思うことを含めての実践なのだということである。

まとめると、薬袋における道つくり、すなわち集落における共同作業とは、正統的周辺参加論における実践の場であり、共同体を共同体たらしめている行為の場であるとみなすことができる。具体的には、こうした場においては、あり合わせのものを創意で使うといった知恵や技術が活用され、集落の時間的・空間的広がりが実感・再認識される。さらに参加する義務が果たされる中で、「村仕事に参加するのは当然の義務である」という感覚自体が獲得され定着していく。つまり、正統的周辺参加者である移住者や非定住者が、これらのことを実践の中で学ぶ場なのである。

３．移住者受け入れの現場における含意

祭りや村仕事のようにムラの人が集まる場は、移住者が「地域に溶け込む機会」である、という認識は比較的浸透しており、実際にそういう場に移住者はよく誘われる。小田切・筒井は、田園回帰の流れの中で、都市から農山漁村へ移住する際のハードルのひとつとしてコミュニティを挙げている[12]。そのハードルを越えるのに共同作業の場への参加が有効であると現場で実感されてきたのは、共同作業の場をきっかけに新参者が実践共同体に参加することで、徐々に「実践の文化」を学んでゆくからだと解釈することができる。

このように、集落を実践共同体と捉え、その成員たる住人は正統的周辺参加によって新参者から古参者に「なって」ゆく、と考えることは、集落を構成してきたイエの子どもが集落での暮らしを選択せず、縁もゆかりもない移住者を集落でともに暮らす仲間として迎え入れるという現代の状況の中では有効な視点であると考えられる。なぜなら、まず集落側にとって、移住したばかりの住民は、集落の生活において、従来の住民と全く同じに振る舞うことができなくても仕方のないことだという認識が共有されるからである。一方の移住者側にとっても、共同作業への参加を通じて「実践の文化」を体得し、それまでにないアイデンティティの獲得につながるという認識が共有される。

こういった認識は自治体などの実施している移住者受入れの実務においても活かされるのではないか。すなわち集落と移住者との意思疎通を図らないのは論外だとしても、一方的に集落の慣行や移住者の意向のどちらかを優先させるのでも十分ではない。集落と移住者との相互作用を通じて両者が馴染んでいくものだという展望を粘り強く集落と移住者双方に共有させるよう働きかけることが求められている。

４．今後の課題

最後に、今後の課題について二点挙げておきたい。

まず、ほかの実践の場面や、参加者の中長期的な変化の実相といった、より幅広く長期間の調査の

必要性である。

今回は、1回の道つくりの詳細な観察から、道つくりが、共同体における実践の場の一つであり、正統的周辺参加を促す機会であることを描いた。そこでは、知識や技術の共有と、アイデンティティの変化という2つの経路で、周辺的参加者が十全的参加を目指して学習していく萌芽が見られた。一方で、道つくりは集落における日常生活とまでは言えず、人々が仕事をしたり、病院にかかったり、買い物をしたりといった日常の様々な場面において実践や参加がどのように行われているのか、あるいは行われないのか検証する必要があるであろう。また、新参者が古参者になってゆくには、それなりの時間がかかると予想される。その実相を解明するには、中長期的な調査が必要であろう。

次に、「半よそ者」についての検討である。薬袋の道つくりにおいて、正統的周辺参加者である非定住者が実践へ参加し、実践の文化を学んでいく過程では、他出者であるCさんや、自身も移住者であるDさん・Eさんといった人々が媒介役となっている点が、非常に興味深い。ボランティアを媒介する存在については、高井の議論においても役割が指摘されていたが[13]、薬袋の事例においては、他出者や移住者といったいわば「半よそ者」といいうる人々の存在が、よそ者である非定住者を実践共同体である集落に引き込んでいるのである。

これまでの地域づくりの議論では、地元住民とよそ者とを対置させ、よそ者の重要性が説かれてきた[14]。しかし、今回の観察で媒介役をしていたCさんたちは、その二分法では捉えきれない存在である。そのどちらでもない、あるいはどちらでもある「半よそ者」の理論的な位置づけを模索しつつ、検討する必要があるであろう。

正統的周辺参加論においても、レイヴとウェンガーは、学習の機会を作り出す存在として「徒弟のほかの徒弟との関係」[15]を挙げ、また新参者の手本の一つとして「十全的実践者になっていく過程で一歩先んじている徒弟」[16]を挙げており、これらの存在についての考察を深めることにもつながると期待される。

謝辞

本稿の執筆にあたりご協力いただいた鞍打大輔氏（NPO法人日本上流文化圏研究所）、助言いただいた平井太郎氏（弘前大学）に感謝します。なお本稿は、第63回東北社会学会大会で報告した内容に加筆・修正したものです。

注

1）高井智仁「集落内外居住者の生活実態解明による山間部の集落維持に関する研究」『学術講演梗概集. E-2, 建築計画II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育, 2009』、pp.401–402、2009年。
2）皆川萌子「新規移住者受け入れ農村における住民の集落意識について」、『同志社政策科学研究』11巻1号、pp.153–162、2009年。
3）株木美佳「農村地域における帰郷者・移住者との集住体形成」、『学術講演梗概集. E-2, 建築計画II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育, 2008』、pp.593–594、2008年。
4）ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー、佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』、産業図書、1993年。
5）薬袋在住者の数え上げによる。
6）薬袋では電気柵の管理を道つくりの作業に位置づけているため適切に管理されているが、町内の他の集落の電気柵は管理に手が回らず、放置されているものが多い。
7）早川町内には、七面山と関係する池が薬袋を含め7か所あると言われており、信者の中にはこれらの池を巡る人もいる。
8）薬袋には日蓮宗の寺があり、地元の人はその寺の檀家である。数年前から無住となっている。
9）前掲書、p.100。
10）前掲書、p.77。
11）前掲書、p.77。
12）小田切徳美・筒井一伸編著『田園回帰の過去・現在・未来：移住者と創る新しい農山村』、農山漁村文化協会、2016年。

13）高井、前掲論文。
14）地域づくりにおけるよそ者の役割に関しては、敷田麻実が「よそ者効果」と呼べる5つのメリットを挙げてまとめている。敷田麻実「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』No.9、pp.79–100、2009年。
15）レイヴ・ウェンガー、前掲書、p.73。
16）前掲書、p.77。